

「蘭館日誌」の医史学的研究

大鳥蘭三郎

が、今後引き続き十八世紀、十九世紀の分についても調査を行ない、その結果を報告したい所存である。

一、医学教授

○一六四一年十月二二日

外科医ユリアン・ヘンセリングは上使並びに奉行の求めにより日本に留まって外科の教授をすることとなつた。彼は今年熱心に教授を行なつて來た。

○一六四九年十一月七日

通詞伝兵衛と八左衛門とが四人の剃髪した人々(医師)と医師共に宿に来て奉行三郎左衛門殿からこれ等の人々に外科を毎日教えてくれるようとの依頼を伝えたので彼等を先生に紹介した。

そこで分けて挙げた項目は七つで、一、医学教授のこと二、診療のこと、三、質疑応答のこと、四、薬草採集のこと、五、註文品のこと、六、薬品輸入のこと、七、その他等の項目について調べた。これ等の各項目につき十七世紀の蘭館日誌のうちからそれぞれ若干例を抜萃して日本語訳を試み、さらに簡単な考按をつけた。

すでに記したように「蘭館日誌」といわれているものは十七世紀から十九世紀にわたって記されておるが、本稿ではまず十七世紀の日記について調査したところを記した

○一六五七年十月二六日

五日から今日まで前に挙げた医師ギンシュウが毎日医師から医学を手広く教わり今では全く十分の様に思

えたので大いに礼をいって別れを告げに来た。

○一六五八年三月二十四日

午後ハタノゲントウが通詞と共にここへ来て外科医学を教えにもらうために来た。

○一六五八年七月十日

度々記したハタノゲントウが通詞庄左衛門と共に礼に来た。そのハタノゲントウは五六ヵ月間我らの外科医から外科術を毎日教わりに来たのだが、近ごろ江戸へ出立するのでオランダ語で書いた二三の処方を書いてくれるようにと頼みに来た。そうすればオランダの外科を教えられたことを証することになるし、また

平蔵の注意をひくことでもあるといった。またこの医学教授は奉行も知つてのことであるといった。それでそれを手交したところ通詞と共に帰つて行つた。

○一六六七年十二月十七、十八、十九、二十、二十一日
通詞と共に久世大和守様の医師が来て、我らの医師から医術を教わりたいといつて來たのでその殿様の医師の名譽のために彼の勤勉と能力とを喜んで推薦した。

○一六七二年十一月二十六日

奉行の命を帶びて奉行所から二人の使者が来て筑後

○一六七三年十二月十七日
我らの医師のところへ來た。

○一六七六年二月十七日

十一月二十六日以来我らの医師から外科と油薬の蒸溜法を習つてゐる筑後様の医師はすべて習つたようになつたが、今日やつて来て油薬の蒸溜の仕方や外科をすべて習つたので免許証を得たいと望んで來た。そうすれば彼の学識の程を領主やその他の人々に知らせることができるからといった。

小考

ここにあげたいくつかの例から次のことがいえる。

日本側の官憲の諒解のもとに日本人医師が蘭館医師から医学特に外科や油薬の製造法についてかなりの日数の間教授を受けていたことは蘭館に医師が置かれた時から行なわれていた。またオランダ医師から度々外科についての証明書を日本人医師が得たことは「蘭館日誌」からも日本側の史料からも知ることができる。

その証明書は数通残つているが、それぞれの内容はいずれも似通つたもので、長年オランダの外科医につい

て修業し、オランダの外科術に堪能していることを証明するというものである。

二、診療

蘭館医師が日本人を診療したことに関する記事はなかなか多い。長崎で行なったものと江戸滞在期間中に行なったものとを分けることができる。

a. 長崎で行なったもの。

○一六四三年二月二十二日

代官平蔵殿が落馬して脚の骨を折って痛みが激しいので我らの医師の來診を乞うたので我らの医師が出向

いて治療の手当をした。

○一六四八年七月二十六日

筑後殿の一僕の脚の創が三年もなおらぬため、我らの医師の治療を受けに來た。

○一六四八年九月二十九日

三郎左衛門殿（註長崎奉行）の高官の一人が、我らの外科医から痛風の手当をしてもらうために我らの住居にやって來た。

○一六五四年十一月六日

我らの医師がこの島の管理人四郎兵衛殿の家に呼ば

れた。その人は老令のために頻死の状態であったが、年よりをなんとか助けてくれるよう頼まれた。そこでそこへ行つて診察したところ何んともすることができるないとのことであった。

○一六五四年十一月十日

我らの外科医は奉行ギエモン殿の命で、一人の僧に案内されて日本の商人西五郎兵衛殿の家へ行つた。この人の背中には大きな腫物があつたが、それを治すために毎日来てくれと頼まれた。

○同十二月二十六日

我らの医師に日本の商人西五郎兵衛がその病気が殆んど治癒したので謝礼として銀五枚を贈つて來た。

○一六五七年十一月二十九日

奉行が外科医を自分の家へ呼んだ。外科医が戻つて来て私にいには、奉行の使用人の一人が猫にかまれたが日本の医者ではよくなおらず、腕に小さな傷があつたが、外科はそれにまず塗り薬を少しそりこみそうして膏葉を貼つた。そうして二三日でよくなつたと

○一六七六年十一月三十日

奉行の命により外科医を通訳のブラスマントと一緒に

町の方へつかわし、ある町役人の家を訪ねさせた。その人は腕に重い傷を負つていた。外科医の報告によればこの者は肺結核に強く犯されているのでその傷の恢復もはかばかしくなく、ついには生命をも危くするであろうということである。

○一六七九年七月十三日

通詞庄太夫が奉行孫九郎殿の命をうけて来て、尻に二十年来瘻孔のある将軍の某使用人を我らの外科医が治療してくれるようにと願いに来た。

○一六九五年七月十一日

右足に四年前からの古傷を持つ奉行近藤備中守様の家中の者が奉行の許可を得て我らの外科医マタイアス・ラクエのところにやつて来てその治療に助言を与えてくれまいかとたずねた。他のもう一人の家中の者も二人の通詞と共に私のところへやつて来て我らの医者にその傷を診てくれるよう頼んだ。そこで外科医は彼を訪ねたが、非常に悪い状態で医者がいにはそれが治るには長期間を要するが、患者はまず全身が不健康であるので煎じ薬を一年間は飲まねばならないと。しかしさし当つては油薬と膏薬とを用いて腫物の

皮膚に塗るよりほかに方法がなかつた。病人がいうにはなおるといふ望みで煎じ薬を飲むことをよく了解した。そうしてさらにそれに必要な薬草とその製法や用法をたずねたのでそれを書いて渡した……

○一六五〇年二月

……正午過ぎ閣下の書記官が我らの宿に来て医師に肩の疵を診せたのでその治療を行なつた。

○一六五〇年二月十日

夕刻小田原の城主稻葉美濃様が腕に怪我したのを診察するため城内から医師を招いたので、直ちに遣わされた。

○一六五三年一月二十三日 二十四日

我らの外科医が将軍附の有名な諧曲師の所へ呼ばれ、その人の胸と肩のところにある大きな腫物の診療を求められた。このものは一見甚だ危険な状態にあり、切開しなければなおることはないものだが、この人は手術を受けることを肯んぜず、むしろ自身の体力に頼って、ただ膏薬を貼つて長期間の痛みにたえる方法しか採らなかつた。

○一六五三年一月二十九日

筑後殿が我らの医師のここで滞在が余り長くない
ので上記の謡曲師の所へ毎日遣わしてくれと頼みに來
た。

○一六五三年十一月十六日

午後私のところにウネビ殿が来て我らの医師にもう
一度その胸を診てもらつた。そこにあつた腫物は殆ん
ど治つていた。

○一六五五年二月二十四日

筑後様の通訳が夕方通詞の名で我らの医師のところ
へ来てギンバ様のためにその尻から多量の出血がある
のを診療してほしいと頼んで來た。それに対して我ら
の外科医は痔靜脈の何本かが肛門内で切れて瘻孔とな
つたのにちがいないと云つた。それに対し必要な薬
を用いた。

○一六六〇年二月二十一日

將軍の有名な家来の一人である大沢平兵衛は二十年
前に馬から落ちてその脚を折り、なお十分に治らずに
いるが、夕刻頃奉行の命で駕籠に乗つて我らの宿に來
り、我らの外科医の助力によつてそれが治る様にと頼

んだ。外科医の考へではこの古い潰瘍は、短時日では
よくなおらぬだらうとのことで、包帯を施し、膏薬を
塗つてその願いによりそれを毎日手當てをしている一
緒に來た日本の医師にその方法を教えた。

小考

長崎、江戸におけるこれ等の記事から次のようなこ
とが考へられる。蘭館医員が日本人に對して行なつた
診療はすべて日本官憲の許可を得てなされたものであ
るが、始めからかなり活潑に取り行なわれていた。蘭
館医師が診療を求められた病気は殆んどすべて外科的
疾患であるが、蘭館医師がこれ等に對して試みた治療
法は例外なく、膏薬を貼布するもので手術の如きはま
だ全く行なわれていなかつた。

三、質疑応答

長崎または江戸において蘭館長、医師等と日本人と
が質疑応答をかわした例も少くない。それ等のうち
には重要なことが述べられていることも稀ではな
い。

○一六四七年一月六日

(大目付井上筑後守と商館長との問答)

問 プリンスはどのような薬を用うるか。

したいろいろの油。

答 健康な時は精神を爽快にするもの、病気の時には必要な薬を用うる。

問 精神を爽快にする薬は何で、その用法は如何。

答 サフランを布に包んでひなどりか小羊の煮汁で煮出して用うる。

問 サフランは当地のものと同じか。

答 否、しかし薬品類の中に加えて持参している。

問 オランダ人の寿命はどれ位か。

答 六十、七十、八十、百以上。

問 君の国にも疱瘡があるか、答 ある。

答 ペゾアルの石とポルクの石の効能は何で、その用法は如何。

答 医師はそれに多数の薬品を混ぜて強心剤に用い、特に毒薬に対して効がある。ポルクは水に入れ少し苦くなつて飲み、ペゾアルは削り、または粉末にして善く練つて用いる。

問 オランダで最も珍重する薬は何か。

答 医師でないから正確には知らぬが、ペゾアル石、ボルク石、真珠、珊瑚、サフランその他本年持参

○一六五三年一月十七日

筑後殿が次のことを質ねさせた。我々のうちでドドネウスの植物書をポルトガル語に翻訳する者はいないかと。これに対し、「否」と答え、わが国で一般に教えられている語学の僅かな知識を以てしてはこのような大冊を翻訳することは不可能であると答えた。

○一六五四年二月十四日（江戸にて）

タ刻我らの医師は將軍侍医であるゾーリツ殿の家に呼ばれていろいろな病気の治療法や薬の製法のことを聞かれた。そうして酒食のもてなしをうけた。この人はなお我々に教わりたいように見えたが、その人の考えではヨーロッパの医術を急いで根本から理解することはできるようになることが必要でそれにはオランダの医師と日本人医師互いに少しでも話せるようになればよいとのことである。

○一六五四年二月二十七日

ヤン・ステイペル氏が午後筑後様の家に呼ばれ、夕方までそこにいた日本の医者といろいろの病気やその治療法、また单一、複雑処方の効力や用法についての

質問を受けた。

○一六五五年二月十七日

筑後殿の通訳ギンネモンが我らの医者のところに来てガレノスとパレーの本から石を溶かす処方を記してくれといつて来た。

○一六五九年四月二十六日

午前我らの外科医が筑後殿の家に呼ばれた。

筑後殿は十時頃通詞のセゼイモンと共に来て通詞に解剖の本を見せて人体の内部の図二三についていろいろの説明を試み、その間に汚い、無恥な質問がなされた。その後筑後殿は我らの医師が明日も来てその面前で豚が解剖されるのに立会うことを願つて来た。

○一六七四年八月二日

午後大通詞吉左衛門が来て今着いた人体解剖模型の用法をたずねた。これに対しその取扱は非常に注意深くしなければならぬと答えた。

○一六八四年四月十二日

通詞ギンボが上外科ヘンドリック・オッペと外科について次のような問答を交わした。始めに二三の腫物とそれ等の治った例について約三十分程話した。それ

からビンゴ様がオランダには日本には知られていない特殊な病氣があるかとたずねた。答、オランダにおける病氣は当地のものと殆んど同じである。ただ暖い地方の体液の過剰から来る病氣が異なる位で、その結果病氣にかかりやすくなる。

小考

右にあげた八例はこの日記に出てくる質疑応答に関する記事のほんの一部分にしか過ぎないが、いずれも重要な事柄を表わしている。第一例は商館長と日本人との間の会話であるが、後年シーボルトが高良斎と問答を試みた例とよく似ている。第二例はドドネウスの植物書がこの頃すでに日本に来ていたことを示し、その当時は（一六五三年）まだオランダ語よりもボルトガル語の方がよく行なわれていたことを証明している。第三例は将軍の侍医ゾーイツなるものがヨーロッパ医学の優秀性を認め、その日本における普及についての一案を述べている。第四例は蘭館医師ステイペルが日本の医者から受けた医学に関する質問を記したもので、この種の質問がほかにもなお数多く行なわれている。第五例はガレノスとパレーの名が知られて

いたことを示すもので、鎖国時代にあってもヨーロッパの医学情勢については全く無知であったわけではなかつたことが知られる。第六例と第七例とは共に解剖学に関するもので、一七五九年には著者の名は不明であるが解剖学書、一六七四年には人体解剖模型が渡来していたことが知られる。

四、薬草採集

蘭館医師が薬草採集を理由に長崎郊外へ出掛けることは長崎に蘭館が設置された最初から度々行なわれた。従つてこのことに関する記事はこの日誌の処々に散見している。そのうちから重だつた数例をあげてみる。

○一六四七年四月十一日

通詞孫兵衛と八左衛門が来て奉行から外科医のほかオランダ人一、二名が通詞らと町に出て山に行き薬草やすみれを採集し、少し遊んでくることを許されたと言つた。

○一六四八年五月九日

奉行の許可を得て商務員補ウーチースと補助員フアン・バイレンが外科医と一緒に薬草採集に出てボンジ

○一六四九年三月九日
ヨイの好意で遠い僧院まで行き、親切に饗應された。

部下商館員八人が奉行の許可を得て通詞二人、ボンジョイ二人と共に長崎の町を通つて郊外へ遊びに出かけた。外科医師も一緒に行き医療のための草根及び新薬を採集した。

○一六五七年一月四日

天気は引続き良好、午後我らの上外科は町奉行の命令で再び日本の医者と我らの通詞すべてと共に二三のボンジョイ等と町へ出て医用のたすけになる薬草を探した。

○一六七〇年三月十日

薬剤師が今日通詞と二人のボンジョイと共に郊外の野原に出かけ医用になる薬草二、三をみつけた。

小考

薬草採集に名をかりて長崎郊外に出ることは蘭館医師が長崎に商館が設置された当初から度々行なわれていた。医師の代りに薬剤師が出かけたこともある。

五、註文品

日本からオランダに註文した品物の名前がこの日誌

の中に处处に見えてゐる。それ等のうちで医学上から見て興味が深い事柄も少なくない。

○一六五二年五月二十四日

井上筑後守註文品のうち

一、鉄製義手 四箇

精巧なもので字を書くことができるもの。

一、鉄製義足 二箇

一、人間の解剖を取扱つた本 一冊

図譜のあるものでポルトガル語で書いたもの。

この註文に応じてそれぞれの品物が註文を発した人に届いたかどうかは明らかにされていないが、とにかくこのような註文がオランダ側に出されていることは西洋医学の優秀性を認め、またそれに関する知識をあ

る程度もつていてものと考えても誤りはないという判断が下せる。とりわけ義手、義足について註文が出されていることは注目に値する。また解剖書の送附を望んでいることも見逃せない記録である。

六、薬品輸入

始めに記したように「蘭館日誌」はオランダと日本との間の貿易を主として記したものであるが、また支那と

日本との間の貿易についても少からぬ資料を与えてゐる。その中で支那からの薬品輸入について多くの記録が残されている。

○一六四一年十月十一日

当一六四一年支那からのジャンク船八十九隻で輸入された品々のうち、薬品 六五包、

○一六四三年十一月七日

支那からのジャンク三十四隻で薬品 二〇〇〇〇斤、

○一六四年十一月十五日

支那からのジャンク五十四隻で薬品 九一、三〇〇〇斤、

一六四七年 薬品 二七二七〇斤、

一六五三年 // 四一七〇斤

一六五七年 // 六八七四五斤

これ等によつて支那からの薬品輸入が具体的に知られる。支那からの薬品輸入が少なからぬものであつたことは想像されるところであるが、それがどれ程の量に達したものであるかはこの「蘭館日誌」によつて詳しく知ることができる。

七、その他

十七世紀に日本へ渡來した蘭館医師のなかでこれまで

に我々によく知られている者は数人に過ぎない。カスペル・スマムブルヘル、ダニエル・ブッシュ、ウイリアム・テン・ライネ、エンゲルベルト・ケンペル等である。なおこの等のものの他にヤン・アンスヨレアン、またはアンスコレアン、アルマンス・カアツ、コルネリス・ハルム（パルム）、ステイビン等の蘭館医が日本へ渡来したといわれている。前段に挙げた四者は私の調べたところにもその名が見えているが、後に挙げた六氏の名はこの表のなかに該当する者が見えていないのでこの点について考えてみたい。

ここにみえるヤンは恐らく一六五三年から一六五四年まで在任したヤン・ステイペルであろう。アンスヨレアン（アンスコレアン）が日本に来たのは一六五四年頃とされているが、この頃に日本に来た蘭館医は「蘭館日誌」によれば一六五三年から一六五四年までの間に在任したものはヤン・ステイペル、一六五四年から一六五五年の間に在任していたものはヨハンネス・ウンシュといふことになつていてアンスヨレアン（アンスコレアン）とは全くちがう。強いてこじつければヨハンネス・ウンシュのヨハンネスがアンスコレアンとやや似通つた響き

をもつてゐる。アルマンス・カアツなるものが日本へ渡來したのは一六六一年から一六六二年とされているが、この年度に日本へやつて来た蘭館員のなかにアブラハム・ハン・ケルペンという下外科の名が見えてゐるので、アルマンス・カアツは或いはこの人に当るのではないかとも思えるし、一六六三年に来た蘭館医にヘルマヌス・フィスヘルというのがあるのであるいはそれに当るのかかもしれない。

コルネリスは「蘭館日誌」の一六七二年十二月二十七日の頃に見える助員コルネリス・ポルティエに当るのではないかと考へられるがコルネリスなるフォールナーメを持ったものは蘭館員のなかに数名いるので俄かに断定できない。ハルムとステイビンの二人については全く考へようがない。

スマムベルヘンについてはすでに述べたのでここでは省き、ライネとケンペルの二人について「蘭館日誌」に述べられているところを紹介する。

ウイレム・テン・ライネは一六七三年（延宝元）十月二十九日に商館長ヨアンネス・カムフイスに従つて日本に渡來した。その時の商館医はウイレム・ホフマンで、

ライネはその翌年の江戸参府旅行の一行に加わり、またその次年度にも引続いて日本に滞在し、一六七五年の江戸参府旅行にも同行している。商館医のほかに医者の資格もあるテン・ライネの如き学識者が日本に来たことは特別のはからいによるものであった。それだけにライネが江戸に来た時にはライネに会ってその意見を聞くためにその宿舎に毎日のように人が集つて来た。ある時は一少年の脚の骨のカリエスについてその予後をたずねられたり、ある時は卒中の発作を来した老人の診療を求められたりしている。このほか医薬品に関する事柄ではさらに多くの質問を受け、また医薬を採集するためにしばしば外出を試みている。商館長がテン・ライネの名を記すのに特に敬称をつけているのは注目される。

ライネは一六七六年（延宝四）十月二十七日に日本を去っているが、江戸に三度目に来た一六七六年四月に書状をその時の商館長ヨアンネス・カムフイスに差し出している。この書状は非常に長文のものでその長さは、これまでに他に類例を見ない程のものである。その内容はここでくわしく述べる余裕はないが、その大要は、日本におけるライネの生活が耐えきれぬ束縛を受けている実

情を訴えてその改善を望んだものである。それによればその束縛がいかにひどいものであったかが分かると共にライネがいかに自由を渴望していたかが読みとれる。

エンゲルベルト・ケンペルは一六九〇年十月日本に来て一六九二年十月に日本を去っている。その間に二度江戸に来ているが、始めの時は商館長ヘンドリック・ファン・バイテネムに従つて一六九一年（元禄四）二月十三日に長崎を出発し、同年三月十三日に江戸に着いている。『蘭館日誌』一六九一年三月二十七日の項に

午後將軍の外科医の一人であるヒラノ・ソウサクといいう者が我々のところに来て我らの医師ケンペルに二三の災害のことについて、その性状や治療にどんな薬を使つたら最も良い結果を得られるかと質ねた。それに対し、答えたので満足して帰つた、

とある。

その翌年には商館長コルネリス・ファン・ウートホルンに随行して三月二日に長崎を出立し、四月に江戸に着いている。ケンペルは四月二十一日と二十四日に医薬に関する質問や患者の診療を求められ、最もなおり難い病気についてたずねられたり、ある患者を診察してその予

後に關する意見を聞かれたりしている。

日本で沢野忠庵と呼ばれているポルトガルの帰化人は「蘭館日誌」では *Joan* と記されている。「蘭館日誌」では一六四六年十一月二十九日の項に始めてその名が見

えている。それによれば背教者と記され、スパイ行為をなしたことを聞いて、『この神を忘れた惡漢の死を望むほどである』と書かれている。忠庵は日本に南蛮流外科の一派を伝えたことになっているが、忠庵のこの方面に關する事蹟については「蘭館日誌」に商館医師の治療を見学に來たこと、一角を商館長のところに持參して、それに関する質問を試みていることなどが記されている。

井上筑後守政重は大目付としてまた宗門改役としてキリシタンの禁教を実施した大名というので有名であるがその名はこの日記の始めから一六六〇年まで實に屢々出てくる。このことは井上筑後守の職務上からも來ていることであるが、この日記の中に示されていることでも分るとおり、解剖書の送附を何度も望んだり、義手、義肢の註文を出したり、西洋薬品の贈与を希望したりしていることなどは單なる好奇心ばかりとは考えられない。さらにドドネウスの植物書のポルトガル語訳を求めたり、

望遠鏡の送附を望んでいることはこの人が自然科学への関心が強かつたともいえる。このようなことを考え合われると井上筑後守は或意味において日本における西洋医学や自然科学の保護者であったということができる。

また「蘭館日誌」には多くの日本の医者の名が記されている。それ等のうちで明かにそれと分るのはギンボとある西玄甫、スギモトチュウエとある杉本忠恵、クリサキドウウとある栗崎道有の三人である。栗崎道有についてはこの日記の一六九八年（元禄十二）四月十三日の項に江戸に於て商館医マテウス・ラケットと外科術に関する質疑応答を交わし、長時間に亘って創傷、梅毒、熱病、瘻孔性潰瘍等の諸病の治療法について話し合ったと記され、また一六九九年（元禄十二）三月二十三日には商館医ウイルレム・ワヘマンと外科術について話し合つたと記されている。その他これ等と類似の記録が栗崎道有に關して示されている。これ等三人の日本人医師のほかに特に名が示されていない者、また名が記されていてもそれ等が日本の何というものに該当するかが明らかでないものが相当数ある。これ等についてはなお今後の調査によって判明するものが少くないと考えられる。